

No.2 八日市市布施のトラ斑



No.1 千歳市東南美沢のテフラと
埋没腐植の累層

No. 1 北海道千歳市東南美沢のテフラと埋没腐植の累層

勇払平野周辺部の丘陵や山麓に、支笏（しこつ）湖のまわりの火山から放出されたテフラ（風成火山灰）が何層にも厚く堆積している。中でもこの美沢の大露頭では、更新世末期から現在までの度重なる火山活動によるテフラ累層が観察できる。降灰の中止期間に、その時の地表をおおった植物に由来する腐植層が形成され、黒色の埋没層の数でテフラの枚数が算えられる。画面では現地表の腐植土層の下につづく10枚の埋没腐植層が識別でき、上位の新しいテフラから、黒と白（又は風化が進んで褐色のパミス層となっている部分）の1セットごとにテフラを区別できた。上から樽前a層（T a - a, 200年前）、T a - b（600年前）、T a - c（1600年前）、植苗統（4500年前）、T a - d（8900年前）、恵庭統などと判定されている。

No. 2 滋賀県八日市市布施のトラ斑土壤

鈴鹿山地に発して琵琶湖に流れる愛知（えち）川の左岸、更新統の丘陵性台地縁辺に、このような赤白の横縞もようの土壤層（トラ斑）がみられる。霜ふりロス状とも形容され、タイガース・モットルとも呼びたい特徴的な土層である。成因は熱帯ラテライト性土壤と同じで、日本には間氷期に生成した古赤色土の一部に残存している（加藤芳朗他1976）。地下水位が土層内で上下に変動するとき、還元状態と酸化状態のちがいに基づく鉄分の色の变化（灰白色と赤褐色）が起るが、水位の間欠的の下降に伴ってその変化が反復されたものと考えられ、水の影響を脱した現在、残存土壤（レリック）として局地的に発見される。

ここに扱った2つの写真は、日本の土壤地理学分野でいま話題になっている2つのテーマ、すなわち主として関東ローム層などのテフラを母材とする土壤の腐植層位の生成と類型化の問題、および第四紀の気候変動との関連で注目される古土壤の問題について、それぞれの一端を示したものである。